

『源氏物語』の方法

空蟬の処世と「帚木三帖」の展開

清水 千香子

一 はじめに 空蟬という女

" You talk feeling idle and useless. Imagine how that is compounded when one has no hope and no choice of any occupation whatsoever. (中略) We cannot even earn ours. "

これは一九九五年度公開の映画『いつか晴れた日に』の主人公エリノア・ダッシュウッドの台詞である。① 莊園主だった父の死後、兄（先妻の子）がその地位と財産を相続したことで、母（後妻）や妹たちとともに生活の激変に直面せざるを得なくなった若い女性が、おのれの不遇をかこつ青年に向かつて語るこの言葉は、字幕で「つまらないとおっしゃるけど、女は仕事も許されず、希望も持てないわ。（中略）女は仕事もだめ」と翻訳される。この台詞は映画の前半、ふたりの気持ちが接近する場面で使われる。しかし、原作の中にエリノアがこのような思いを吐露する場面は見当たらない。

この映画の原作『分別と多感』（原題 "Sense and Sensibility"）がイギリスで出版されたのは一八一一年のことである。それから一八〇年あまりの歳月を経て、階級社会に縛られる女性の「自活したくてもできないもどかしさ」が明確な言葉となり、さしたる違和感もなく作品に溶け込むのは、映画『いつか晴れた日に』が原作者ジェーン・オースティンの手を離れ、現代の映画人によって構築された別の物語だからであろう。ち

なみに脚色を担当したエマ・トンソンはケンブリッジ大学を卒業後、俳優・脚本家・監督として成功した一九五九年生まれの女性で、この映画ではエリノアを演じている。

文学作品が後人の手で翻案されるとき、翻案時における「現代」が遮断されることはむずかしい。そこには今を生きる人々の感覚なり人生観なりが少なからず反映され、ときには行間からも言葉が立ち上がる。その意味で、エリノアの "We cannot even earn ours." という発言は、トンソン自身の「もどかしさ」から生まれたものであり、エリノアの問題を現代人の感覚でとらえ、その判断をエリノアに押しつけたとも言えるだろう。いずれにしても、こうした脚色によって原作と観客との距離が縮まっていくのは確かである。

しかし、その一方で、後人の脚色がなくても別々の作品に「同じ物語」を見出す場合がある。『分別と多感』の二年後、オースティンは日本でも人気の高い『高慢と偏見』（原題 "Pride and Prejudice"）を発表する。この作品はハートフォードシアの小地主ベネット氏の娘たちが結婚相手を得るまでの経緯を描いたもので、作者の鋭い人間観察から生まれた興味深い人物が次々登場する。その中で今回注目したいのは、次女エリザベスの友人シャーロット・ルーカスである。シャーロットはルーカス卿の「ものわりのいい頭のいい娘」で、年のころは二十七、当時の独身女性と

しては危・機・的・な・年・齢・に達していた。おそらくそれが最大の理由であろう、牧師のコリンズがエリザベスへの求婚に失敗したことを知ると、計算ずくで彼に近づき、首尾よくコリンズ夫人におさまってしまう。次の引用は結婚を承諾した直後のシャーロットの思いを述べた部分である。

彼女の感慨は、大体に満足のゆくものであった。なるほど、コリンズ氏は利口な人でも感じのいい人でもなかった。いっしょにいれば退屈だし、自分に対する愛情も、想像上のものにちがいがなかった。それでも彼は、自分の夫になる人であった。男とか夫婦生活とかいうことには重きをおかないで、ただ結婚ということが、常に彼女の目的であった。高い教育をうけた財産のない若い婦人にとっては、結婚が唯一の恥ずかしくない食って行く道であった。幸福を与えてくれるかどうかはいかに不確かでも、欠乏からいちばん愉快にまもってくれるものは結婚であった。それを彼女は今えたのであった。二十七歳の今日まで、ついぞきれいだと言われたことのなかった彼女は、結婚の幸福をしみじみと感じた。

若くない、美しくない、財産もない、このままでは確実に家族のお荷物になり下がるだけ。そんな現状を直視し、結婚相手が愛情や尊敬の対象になり得ない人物であることを知りながら、きわめて現実的な選択をしたシャーロットに対して、二十歳そこそこのエリザベスは批判的である。しかし、作者は「結婚の幸福をしみじみと感じた」という言葉を裏切ることなく、シャーロットに「なるべく夫と顔を合わせなくてすむ生活」を作れるだけの才覚を与え、居心地のよい安定した暮らしを保障する。

シャーロットのような、安定を第一の目標に「現実」を手堅く処理する女が物語の主人公になることは稀である。たいていは脇役として主人

公が選ばない「別の生き方」を体現すると、その「現実」に飲み込まれるようにして役目を終える。しかし、「現実」を受け入れて無茶な行動に出ない作中人物たちの中にも、ときにはその処世の潔さ、賢さによって、作中忘れたい印象を残す人物がいる。

『源氏物語』の作者は、空蟬という女に若さも外見上の美しさも与えなかった。

目すこしはれたる心地して、鼻などもあざやかなところなうねびれて、にほはしきところも見えず。

その人生は順調なものとは言えず、帝から「宮仕へに出だし立てむと漏らし奏せし、いかになりにけむ」と氣にかけられた存在でありながら、中納言兼衛門督だった父の死によって宮仕への道を断たれ、受領の後妻になる。夫の伊予介は高齢ながら、「人もいやしからぬ筋に、容貌などねびたれどきよげにて、ただならず気色よしづきてなどぞありける。」とあるように、風格のあるひとかどの人物であり、息子の紀伊守によれば、妻には「私の主とこそ」という思いを抱いているという。しかし、妻の夫に対する思いは「常はいとすくすくしく心づきなしと思ひあなづる伊予の方……」^⑤というものに過ぎない。

若くない、美しくない、地位も財産もない、生活のためには格下の夫に頼るしかないのに、その夫には愛情も尊敬の念も持てない。空蟬のこの状況は『高慢と偏見』のシャーロットのそれとよく似ている。もちろん、女流作家による古典的名作という共通点はあるものの、いきなり時代も場所も異なる作品を並べて、二人の女を見比べるのは乱暴な話である。しかし、双方の作品を読む限り、社会的な立場で生活する機会を持たない「そこそこの身分の女」にとって、結婚が社会的な関係を持つ数

少ない機会であったという事情は十〜十一世紀の日本も十九世紀の英国もさほど変わらなず、この点だけに限って言えば、有利な結婚につながるものを一切持たない二人の女の境遇は似たり寄ったりだったと思われるのである。ただし両者には決定的な違いがある。それは、一方は自らの知恵で手に入れた「結婚の幸福」に満足しているのに対して、もう一方は安定した生活を得ても、苦悩や哀感から解放されていないという点である。その違いに理由を求めるならば、性格や人生観の違いもさることながら、シャーロットには後にも先にもコリンズという男しか現れなかったのに対し、空蟬には源氏という類まれなる男との出逢いがあったという点に尽きる。

空蟬は源氏がはじめて愛した「中の品の女」である。そして、自分の意志を貫いて源氏を「拒んだ」女である。源氏を知ったことで、空蟬は過去と対峙し、現在を凝視し、未来を見定める必要に迫られた。それはあきらめた夢と納得できない現実を行きつ戻りつしながら自分の人生の行き着く先を見極めることに他ならず、おのれを知った上で、最初から夢や希望を持たないまま、現実とうまく折合うシャーロット・ルーカスには背負えない役目だといってよいだろう。そして、女に精神的なもの求めないコリンズ牧師も、人の心を揺さぶるような存在にはなり得なかったのである。

空蟬は傍系の人物に過ぎない。しかし、源氏と関わることでほんの一瞬切なく揺らぐ姿や、夢の実現を見てもその夢に溺れない心のありようには、『源氏物語』の主要なヒロインたちが長い年月をかけて紡ぐ物語に匹敵する魅力がある。本稿ではそんな空蟬を中心に、同時期に登場する女性たちとの比較対照を試みながら、その物語上の機能について考察してみたいと思う。そして、そこに見え隠れする作者の創作意図を探りたいと思う。

なお、本稿では『源氏物語』の本文を『新編日本古典文学全集源氏物語』から引用した。

二．空蟬と葵の上　「忍びたまひける隠るへごと」のはじまり

空蟬は「帚木巻」で登場し、「夕顔巻」で伊予に下向して源氏の前から姿を消す。源氏とはその後「関屋巻」で再会するものの、空蟬の人物像が明確に浮かび上がるのは、やはり源氏の青年期を描いた「帚木三帖」でのことである。この「帚木三帖」（「帚木巻」「空蟬巻」「夕顔巻」）は源氏十七歳の数か月を描いたものとされ、「帚木巻」冒頭にある語り手の前口上が、「夕顔巻」の結びの語と照応するところから、三帖まとめて「忍びたまひける隠るへごと」を綴る源氏の外伝と位置付けられている。

この「帚木三帖」に先立つ「桐壺巻」は、葵の上と結婚しても一意に藤壺を慕う源氏の姿が描かれておわる。以下はその一部である。

心の中には、ただ、藤壺の御ありさまをたぐひなしと思ひきこえて、さやうならむ人をこそ見ぬ、似る人なくもおはしけるかな、大殿の君、いとをかしげにかしづかれたる人とは見ゆれど、心にもつかずおほえたまひて、幼きほどの心ひとつにかかりて、いと苦しきまでぞおはしける。^⑥

十二歳の源氏は藤壺を一意に想い、藤壺のような方を妻にしたいと強く願う一方で、美しい箱入り娘の葵の上に情が移らず心を痛めている。また、亡き母（桐壺更衣）の里の邸が帝の命令で立派に改造されるのを見ても「かかる所に、思ふやうならむ人を据えて住まばやとのみ、嘆かしう思しわたる」というありさまで、「さやうならむ人」の面影を胸に「思

ふやうならむ人」を求める源氏の心に葵の上が入り込む余地など全くなかったことがわかる。したがって、この「思ふやうならむ人」への渴望に注目すれば、「桐壺巻」から紫の上との出会いが実現する「若紫巻」への流れはごく自然なものであり、間をつなぐ「帚木三帖」が光源氏外伝とみなされるのも当然のことだと言えよう。しかし、葵の上に対する感情は空蟬への傾倒と決して無縁ではない。むしろ葵の上の存在があったことで、源氏は「雨夜の品定め」を機に「中の品の女」に関心を抱き、その関心が空蟬との関係へ発展したと考えられるのである。

宮中宿直所で交わされる女性の品定めは、陰暦五月頃の長雨の最中に行われる。源氏はこの「雨夜の品定め」の後、左大臣を氣遣って左大臣邸に出かけて葵の上と対面する。それは頭中将、左馬頭、藤式部丞から聞かされた女性論の記憶も鮮明な折のことであり、「方違え」のために紀伊守邸に向く直前、すなわち空蟬と契る直前のことである。次の引用はその場面からのものである。

おほかたの気色、人のけはいも、けざやかに気高く、乱れたるところまじらず、なほこれこそは、かの人々の棄てがたくとり出でしまめ人には頼まれぬべけれど思すものから、あまりうるはしき御ありさまの、とけがたく恥づかしげに思ひしづまりたまへるを、さうざうしくて、中納言の君、中務などやうのおしなべたらぬ若人どもに、戯れ言などのたまひつつ……^⑧

この一節を読む限り、結婚後五年の月日を経ても、源氏の葵の上に対する思いにほとんど変化はみられない。源氏は隙のない葵の上を妻として信頼が置ける人だと確信するが、それで心が満たされるわけではない。その思いを端的にあらわすのが「さうざうし」である。「さうざうし」は

日本国語大辞典(第二版)において、「あるべき物事がなくて、もの足りない気持がする。てもちぶさたで、心さびしい」と説明されるが、作者は源氏が葵の上を感じる物足りなさをこの一語で明解に説明すると、女房たち相手に冗談を言わせ、そのくだけた様子を女房たちに「見るかひあり」と賞賛させる。要するに、取り澄ました「上の品の女」には言えない冗談も、自分を見上げる若い女房たちには気楽に言えるということであり、心も開けるといふことであろう。源氏がひとりの平凡な男に映る一瞬である。

「中の品の女」という未知の存在への好奇心、本来なら最も「思ふやうならむ人」であってほしい妻に感じるさうざうしさ。これらは源氏と空蟬の関係をより自然に実現させるために、作者が源氏の心の状態にほどこした下準備である。その下準備ができてから「雨夜の品定め」に参加させ、ついで左大臣邸を訪問させた後、「方違え」という理由をつけて紀伊守の邸に送り込んだのである。『源氏物語』では、のちに重要な役割を果たす人物の登場がさりげなく予告される場合がある。空蟬の場合、空蟬その人の登場を予告する言葉は見当たらない。しかし、源氏が女房たちに心を開く様子も含めて、その後の思い切った展開を納得させるだけの周到な用意が事前にあつたのである。

ところで、「帚木三帖」に登場する女たちは、それぞれが別の女と何らかの形で対照をなし、その対照の中で個々の人物像が明らかになるようにみえる。葵の上を感じる物足りなさが「中の品の女」への興味につながり、その先に居合わせたのが空蟬であつた。その空蟬には継娘の軒端萩と碁を打つ場面が用意され、源氏にのぞき見られる。先に引用した空蟬の外見描写「目すこしはれたる心地して、鼻などもあざやかなるところなうねびれて、にははしきところも見えず。」はこの場面からのものであるが、実は「言ひ立つればわろきによれる容貌を、いといたうもてつ

けて、このまされる人（注・軒端菰）よりは心あらむと目とどめつべきさ
 ましたり。」という一文が続いて、空蟬の内面から表出する魅力が、若い
 娘の美しさや軽薄さによって引き立てられている。つまり、同じ不器量
 でも『高慢と偏見』のシャーロット・ルーカスの不器量がどちらかとい
 えば縁遠さの裏付けになっているのは事情が異なり、空蟬の場合は内
 面の美しさを際立たせるため、あえて外見の美しさが削られたのである。
 また「夕顔巻」に目を向けると、源氏は気詰まりな「六条わたりの女」
 から逃れるように、遠慮のいらぬ夕顔と深い仲になる。要するに、源
 氏というひとりの青年を軸に、身分も境遇も性格も異なる女たちが、もっ
 ぱら本人たちの知らないところで他の女の人生に影響を与え、そして与
 えられているのである。夕顔との恋愛を間接的に後押しした「六条わた
 りの女」こと六条御息所にしても、本人の意志に関係なく物の怪となっ
 て、出産直後の葵の上を死に追いやり、自身は「物の怪の正体は自分か
 もしれない」という噂に悩みながら源氏との恋愛に限界をみて伊勢へ下
 向する。この六条御息所の決断と身の振り方が紫の上をヒロインとして
 一気に浮上させたことは、「葵巻」以後を読めば明らかである。

こうした展開の根底にあるのは、やはり源氏の「ないもの」にこだわ
 り、その「ないもの」を別のところで見つけようとする心のあり方であ
 る。そもそも『源氏物語』という作品は、源氏の藤壺に対する報われ
 ることのない絶対的な思慕から始まる物語である。その「一番大切な物
 は手に入らない」という物語の基本中の基本である構図が、「帚木三帖」
 にも影を落としているのである。この三帖に登場する女たちは、そんな
 源氏の心に振り回されることで自身の「物語」を創出していくのだと言
 える。

さらに、「帚木三帖」には身分や階級の問題が深く関わっていることも
 見逃せない。周囲の様々な思惑から妻となった葵の上は、源氏にとって

言わば勞せずして手に入れた女である。この結婚が成立したことで、源
 氏は左大臣家という後ろ盾を得て社会的地位を確実なものとした。また、
 自分から熱烈に求愛した「六条わたりの女」は元東宮妃という高貴な身
 の上ゆえに、愛情が冷めても疎略に扱えないという事情がある。つまり
 源氏には葵の上や六条御息所に対して義理や義務があるのだが、両者を
 それぞれ女としてみると、感じるのは「気詰まり」でしかない。「中の
 品の女」との恋愛沙汰は、そうした「上の品」に属する女たちからの逃
 避である。そして、相手が「中の品」だけに、傲慢で独りよがりな愛情
 表現を平気で押しつけるのである。しかし、「中の品の女」との恋愛は続
 かない。空蟬は「思ふやうならむ人」の候補者として登場するわけでは
 なく、源氏がこの女と契つたのは「さうさうしさ」をうめるためであり、
 「中の品の女」だったからに過ぎない。ひとりの女として強く意識するよ
 うになったのは、契つたあとでこの女が持つ「気概」を知ったからであ
 る。しかし、その時点で空蟬は源氏の求愛に対して結論を出していた。
 つまり、不運な過去から身の処し方を学んだ女の決意が世間知らずの若
 者に崩せるわけもなく、二人の関係はあつけなく終わるのである。要す
 るに、所詮この関係は「忍びたまへる隠るへごと」であり、「中の品」に
 頭中将らという魅力的な女は存在しても、「思ふやうならむ人」は存在し
 ないのである。

そのことは夕顔とのいきさつをみてもわかる。

三、空蟬と夕顔 〵 ふたりの「中の品の女」

増田繁夫氏は「空蟬と夕顔 —— 処世のかしこさとつたなさ——」

で「周知のごとく、帚木巻は空蟬・夕顔と密接に一まとまりをなし、そ
 の最初に女性概論としての『雨夜の品定』が記され、その概論に対する

各論としての空蟬と夕顔の物語が続く構成になつてゐる。」との見解を示し、二人の女の物語は源氏が偶然経験した具体例として付け加えられたのではなく、「十分に商量され計算された設定になつてゐると考へるべきであらう。」と続けている¹¹。増田氏のいう「概論」を『中の品』には魅力ある女が存在する」と要約できるなら、各論として示される物語は「指食いの女」や「木枯の女」のエピソードをしのぐ内容が期待される。その各論も複数用意されるのなら、それらは趣の異なるものでなければ、源氏が「この世には様々な女がいる」という事実を知ったことにならない。実際、各論の一方は頭中将が「中の品」の代表格として取り上げた受領階級の人妻の物語であり、もう一方は五条界限でひっそり暮らす正体不明の女の物語である。しかも後者については、実は頭中将の体験談に登場する「常夏の女」その人だったという結末まで用意されており、こうした工夫が増田氏のいう「十分に商量され計算された設定」の一部であることは間違いない。

しかし、一見、全く違うタイプに映る二人の女も、それぞれの人物造型をさぐると共通点が見出せる。ひとつは、二人の背景に説話や伝承の要素が認められることである。夕顔の人物造型に唐代の伝奇小説『任氏伝』や「三輪山式神婚譚」との関連があり、こうした素材が非日常的で幻想的な雰囲気醸成に一役買っているのは明らかである。空蟬の場合も「一夜妻譚（天人女房譚）」や「帚木伝説」との関連がみられる¹²。特に信濃国に伝わる「帚木伝説」の帚木は「帚木巻」終盤で交わされる贈答歌、〈源氏〉「帚木の心をしらすその原の道にあやなくまどひぬるかな」〈空蟬〉「数ならぬ伏屋に生ふる名のうさにあるにもあらず消ゆる帚木」に詠み込まれ、空蟬が自分の身をそれにしたとえるなど、「帚木三帖」の中では重要な存在になっている¹³。

ふたつ目は、どちらも「中の品」に成り上がったのではなく、没落し

た女であるという点である。空蟬の父が上達部に届かない中納言兼衛門督で、娘の入内を画策していたことは既に述べたが、五条の「むつかしげなる大路」の粗末な家に住む夕顔もまた、その死後、侍女右近の証言で三位中将の遺児だったことが明らかになる。興味深いのは、「雨世の品定め」における左馬頭の発言に夕顔を連想させる言葉が含まれていることである。左馬頭は「さて、世にありと人に知られず、さびしくあばれたらむ葎の門に、思ひの外にらうたげならむ人の閉ぢられたらむこそ限りなくめづらしくはおぼえぬ。いかで、はたかかりけむと、思ふより違へることなむあやしく心とまるわざなる。」と語る¹⁴。つまり、「荒れ果てた家に愛らしい様子の女がいれば、その意外さに心がひきつけられる」と言うのである。零落した女に対する関心は左馬頭だけのものではない。夕顔との間に子までなした頭中将も、故常陸宮の姫末摘花を救い出す源氏も、この種の女に心惹かれてゐる。

西郷信綱氏の「客観的な構成と手法をもつ作り物語の『竹取物語』、和歌を軸とする歌物語の『伊勢物語』、この二つの流れが交叉しながらその後の物語文学史は進んでいく。」という言葉通り、『源氏物語』もまた先行文学の存在を意識し、その要素を取り込んで構築された物語であり、先行作品の影響を示すものは作品の端々にみられる。梅壺女御と弘徽殿女御の絵合が「まづ、物語の出で来はじめの親なる竹取の翁に宇津保の俊蔭を会はせて争ふ。」と始まり、浮舟を見つけた横川の僧都の心境が「かぐや姫を見つけたたりけん竹取の翁よりもめづらしき心地するに」と語られたことなどはその具体例である。荒廃した家とそこに住む美しい女という組み合わせもまた、『伊勢物語』や『宇津保物語』等の先行文学にみられ、夕顔は過去の物語からもヒントを得て創作された登場人物のひとりだと言えよう¹⁵。そして、同じように零落した空蟬は、先行作品の持つ虚構性に現実社会の様相を色濃く反映させて作られた女だと考えられ

る。

さらに、この二人には二面性があることも共通している。夕顔の一般的なイメージは「ものおち」する「らうたげ」な女である。それは源氏が愛したイメージであり、廃院の物の怪にむぎむぎと命を奪われるというはかない最期もこのイメージがあつてこそ説得力がある。しかし、そのはかなげな姿とは裏腹に、「心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花」と贈歌して、源氏に働きかけたのは夕顔自身なのである。一方の空蟬は、一度は源氏の強引さに屈したものの、その後は頑なに源氏を拒み続ける。その姿に貞節の二文字をみることは可能だが、源氏に求愛される空蟬の胸の内に夫への愛情や敬意があつたとは言いがたい。

いとかくうき身のほどの定まらぬありしながらの身にて、かかる御心ばへを見ましかば、あるまじき我頼みにて、見直したまふ後瀬をも思ひたまへ慰めましを、いとかう仮なるうき寝のほどを思ひはべるに、たぐひなく思うたまへまどはるるなり。よし、今は見きとなかけそ²⁰。

これは契りが果たされた直後の空蟬の言葉である。「この契りは前世からの因縁だ」と言う源氏に対して、空蟬はこの一件を口にしてくれるなと頼みながら、「老地方官の後妻という情けない身の上ではなく、未婚のままの娘でこうした情けにあずかれるのなら、いつかはもつと違つた扱いを受けることもあるだろうけれど……」と訴える。つまり、源氏の手荒で屈辱的な振舞いに反発しながら、実際はその求愛に無関心ではいられないのである。そして、反実仮想の表現「ましかば・・まし」を用いて、夢の実現が遅すぎたことを嘆いている。

臆病で従順な女は、源氏の心を捉えるためなら大胆にもなれる。受領の後妻として生きる女は、源氏を拒みながらも強く惹かれていた自分に

気づく。二人の態度に注目すれば、源氏には女の人生に光を当て、平生は隠されている「真の姿」を引き出す力があると言えるのではないだろうか。そしてそこには、高貴な身分や優雅な外見、およびそれらにふさわしい心ばせを与えたうえで、源氏を一種の媒体として女たちに接近させ、次の瞬間に起こる化学反応を通して、「女の真の姿」を描こうとする作者の意図があつたのではないかと考えられる。源氏は女に理想を抱き、その理想を求めて恋愛遍歴を重ねる。作者は源氏の様々な恋愛経験を丹念に描いて読者に事の成り行きを注目させながら、実はその「ないものさがし」の過程を通して、「女とはこういう生き物なのだ」という見解を示そうとしたように思えるのである。女に二面性があるのは必ずしも特別なことではない。ただ、奥に潜む一面を引き出すには、きっかけとなる強い光が必要である。空蟬にとって、源氏がかつて夢見た世界そのものである。その夢が、夢の方から自分に近づいてきたのなら、心穏やかにいられる女がいるだろうか。

思えば『高慢と偏見』のコリンズ牧師は、相手の人間性などには一切関心を持たず、ただ「妻」と呼べる女が必要だというだけで、たまたま現れたシャーロットと結婚した男である。このくだりは「中の品の女」に関心があつた源氏が、折よく現れた空蟬と契る経緯と似ていなくもない。ただ、コリンズ牧師にとつて都合がよかつたのは、相手のシャーロットが生活の安定以上のものを求めていなかったことである。お互いが相手の精神性に何も求めない以上、シャーロットの本心がコリンズ牧師の前で露わにされる必要もなく、また彼自身がその本心に気づくこともない。おそらくジェーン・オースティンは現実世界の様相を切り取り、そこに多少の誇張を加味して読者の冷笑や苦笑を引き出そうとしたのであろう。たとえ、そこまでのあからさまな意図がなくても、結果的にシャーロットとコリンズ牧師の結婚は、作品中傑出したエピソードに仕上がっ

ている。そのコリンズ牧師にくらべると、若い源氏が相手にしたのは複雑な内面を抱えた相当「手強い女」だったと言わざるを得ない。

四：空蟬と六条御息所く拒んだ女、拒まなかった女

藤田加代氏の『「空蟬」の物語―空蟬造型の特異性について―』には、夕顔と空蟬は源氏との関係をそれぞれ違う形で認識していたという指摘がある。

同じ「没落組の中の品」とは言っても、例えば夕顔や末摘花は、そうした「我」が「上が上なる品」の源氏と関わる中で、「没落組の中の品」であるが故の苦悩や悲哀を意識化することはない。空蟬にとりわけ自負と自卑とのほざまに苦悩する意識構造が露出するのである。²²⁾

おのれの身の上を深く意識することなく恋愛に耽溺する夕顔。源氏と知り合って、「自負と自卑とのほざま」で苦悩する空蟬。その空蟬には自分の状況を把握し、今後を見通す力が備わっていた。これこそが空蟬の聡明さの証であり、知的な女として登場したはずの「六条わたりの女」こと六条御息所に欠けていたものなのである。

次に、林真理子著『六条御息所源氏がたり一、光の章』から「空蟬の君」の一節を引用する。

この伊予介の妻とて、若い頃はそのようなことをあれこれ思い描いたに違いありません。物語のように、美しく高貴な男が自分の所へ現れ、そして通ってくれるようになる。しかし伊予介の妻にその夢がかなった時、女はその夢を見てはいけない立場にいたのです。女はきっぱりとそ

のことを告げました。そして二度目は、体を張ってあの方を拒否するのでございます。

そしてそのことが私を驚嘆させ、敬いの心さえ芽生えさせるのです。

私はどうして二度目を拒否しなかったのでしょうか。(中略)

一度だけのあの方との契りは、どれほど黄金色の思い出になっていることでしょうか。私はそれが羨ましくてたまりません。私もどうして一夜だけにしておかなかったのか。いや、いやそれはとても無理、私には出来ませんでした。²³⁾

この小説は、六条御息所の視点から源氏の人生が語られる新たな『源氏物語』である。したがって、ここでの六条御息所の言葉は作家の創作であり、実際の物語の中で御息所が空蟬の存在を知ることはない。しかし、六条御息所が空蟬の若き日の夢を推察し、その夢を振り切つて源氏を拒んだその決断に敬意を抱き、なぜ自分もそうしなかったのかと悔やむ姿は、原作への深い理解に裏打ちされた想像であり、非常に興味深い創作である。

空蟬と六条御息所はどちらも源氏より年上である。また、父の死で宮仕えの機会を逸した空蟬と同じく、六条御息所も夫と死別しなければ東宮妃として生きたはずの人であった。さらに、「思ひあがれる気色に聞きおきたまへるむすめ」とも書かれた空蟬に強い自尊心があったように、六条御息所も一貫して「誇り高き女」として描かれる。年上で、自負心の強い、結婚経験のあるこの二人の女のうち、ひとり源氏を拒み、もうひとりはそのうしなかつた。

作者は「帚木三帖」で拒んだ女の物語を一通り完結させた後、四帖分の間をあけて、「葵巻」で拒まなかった女の物語を本格的に始める。この四帖分の間があることで、六条御息所が話の中心に置かれるころには、

空蟬の影がめつきり薄れてしまうのは事実である。しかし、「六条わたり
の女」の初登場が「夕顔巻」冒頭であることと、「夕顔巻」巻末で空蟬が
伊予に下向することは単なる偶然の結果なのだろうか。しかも、身分や
境遇、「いともものをあまりなるまで思ししめしたる御心さま」という性
情、源氏とのなれそめ、そして夜離れなど、この女に関する情報のほぼ
すべてがこの「夕顔巻」で明らかにされている。作者は空蟬が物語に大
きく関わっていた時期に、六条御息所のイメージを準備したということ
であろうか。いずれにせよ、作者の頭の中で二人が同時期に存在してい
たことは確かである。

ところで、空蟬はなぜ源氏を拒んだのだろうか。これは多くの研究者
にとって大きな関心事であり、その問題を論じた論文も多数読むことが
できる。その一例として、ここでは原田敦子氏の「空蟬の夢」から一節
を引用する。

比類ない相手の様子が、逢った後のみじめさを募らせるであろうと、
つれない態度をとり続けたというのであるから、空蟬の思いは自分が人
妻であるという点ではなく、目の前にあらわれた夢の如き相手と、現在
自分が置かれた境遇に、余りにも大きな懸隔が存するという一点にか
かっていると考えられる。もしこのまま源氏の求愛を受け入れたなら、
或いは受け入れ続けたなら、たちまちに飽きられて顧みられなくなつて
しまうか、さもなくば召人の如き関係が続けなければならぬであろう
ことを、伶俐に感じとっていたのである。事実、源氏の空蟬への思いは、
当初、雨夜の品定めで関心呼び起こされた「中の品の女」とのほんの
ゆきずりの冒険のつもりが、拒否されることによって、より執着の度を
強めていったのであるから、この空蟬の勘はあたっていたと言えよう。
源氏の愛を失わないため、そして自分の誇りと夢を傷つけないため、唯

一、空蟬に可能だったのが、愛しながら拒否するという行為だったのである。²⁴⁾

原田氏の見解を参考に空蟬の決断の理由とその後の展開についてまと
めると、以下のように整理できる。

- (1) 源氏と身分が釣り合わないことを自覚した。
- (2) 求愛を受け入れた後の不幸な展開が予想できた。
- (3) 恋愛に溺れるよりも、自らの誇りを守ろうとした。
- (4) 源氏を拒むことによって、結果的に源氏の心をとらえた。

原田氏と同じ視座でこの問題を論じた先行研究は非常に多い。そして、
増田繁夫氏の「光源氏の空蟬をあつかふあつかひ方に、軽い身分の女と
見下げた態度が露はに見えるのに対して激しく抗議非難したものである。」
という指摘も空蟬の性格を考えれば当然のことと首肯できる。

それでは、空蟬とは逆に、六条御息所はなぜ絶望的な恋愛に執着した
のであろうか。もちろん、御息所の特徴である「思い詰める性格」が決
断を鈍らせたことは想像に難くない。しかし、ここでは御息所の人間性
に加えて、作者に「諦めた女の物語を完結させた後、諦めなかった女の
物語を展開させたかった」というたくらみがあったと考えてみたい。そ
の目的のために、作者は「階級」の壁を取り除くべく六条御息所に元東
宮妃という身分を与え、「身の程を知る」という口実を許さない設定にし
たのである。六条御息所は、原田氏が空蟬の心を推量した「もしこのま
ま源氏の求愛を受け入れたなら、或いは受け入れ続けたなら、たちまち
に飽きられて顧みられなくなってしまう」という言葉通りの目に遭う。
高貴な身分でありながら、源氏の心変わりを受け入れられず、屈辱的な
思いを重ねて身を破滅させる六条御息所と、「中の品」ゆえに屈辱を避け
る賢明さを持ち、絶望的な状況に陥ることがなかった空蟬。ここで思い

出されるのは、作者もまた受領階級出身で、年の離れた夫もまた受領だったという事実である。「空蟬は作者の『自画像』である」という見解は珍しいものではない。それゆえ、夫と死別した空蟬のちに二条院に引き取られるという展開の背景に、作者の同じ境遇の者に対する共感があつたとみてもよいのではないだろうか。『竹取物語』では、かぐや姫に求婚した貴族が、姫から出された難題に挑んで失敗し、結局は物笑いの種になる。この貴族たちに準拠があつたことは広く知られており、それが『竹取物語』に当時の貴族社会を批判する精神を読み取る根拠にもなっている。したがって、『竹取物語』に精通していた『源氏物語』の作者が、虚構の物語に現実社会を反映させる手法を学び取り、それを「中の品」の悲哀から「かしこさ」を抽出し、「上の品」の誇りから「かなしさ」を創出するという方法で実践して、自分を取り巻く社会にささやかな批判を試みたと考えてもよいのではないだろうか。

空蟬は結果的に六条御息所が取るべき道を示す役割を担うことになった。そして、源氏を拒むことで増田氏の言う「処世のかしこさ」を示し、源氏に強い印象を残したのである。それに比べると、源氏と出会った後の六条御息所の人生はあまりにも切なく悲しい。しかし、六条御息所の物語は源氏の人生とともに広がっていくのに、空蟬はあくまで「帚木三帖」のヒロインである。結局、物語の肝心なところを支えるのは必ずしも「かしこさ」ではなく、むしろ知性や理性では対処のしようがない「かなしさ」であるということなのかもしれない。

五. 結語

ジェーン・オースティンはイングランドの南部・西部で一生を過ごし、平凡な生活の中、同じ田舎に住むいくつかの家族を創作の材料とし

ながら、後世に残る作品を書いた作家である。『源氏物語』の作者も、越前守の父に同道してその任国へ下った経験はあるものの、一生の大半を限られた場所で、限られた階層の人々とともに過ごしたはずである。二人は狭い世界を鋭い観察眼で切り取り、それぞれの方法で人間の様相、社会の実態、そしてそれらに対する批判を創作の糧にしたのであろう。

「帚木三帖」は言うなれば源氏の「失敗談」である。まだまだ世間知らずの源氏が、複数の女性との出会いを通して大人の男になるまでの一段階を描いたものとも言える。その段階において、空蟬は葬の上からの逃避場所となり、夕顔に欠けるリアリティーを補い、後に登場する六条御息所とも関連を持ちながら、「帚木三帖」の展開を支え、そして源氏の前から消えて行く。その身の処し方が「貞節」とは無関係で、むしろひたすら「自分の人生」を考えた利己的なものであつたという結論にオースティン流の笑いはない。しかし、それでいてシャーロット・ルークスの知恵に通じるものが全くなかつたとも言いきれない。

『源氏物語』の時代、結婚を通して経済的な安定や社会的体面を保ちながら生きた女は数限りなく存在していた。空蟬はそうした女の代表として造型され、高貴すぎて人間臭さを欠いた葵の上や、劇的でそれでいて儂い人生を送る夕顔や、あまりにも深刻に恋愛を受け止めた六条御息所たちの「反射鏡」のような役割を担っていたのである。その意味でも、作者が源氏のために用意した「帚木三帖」の構図は、計算の行き届いた人間関係によって支えられていたのだと言えるだろう。

注

- ① 映画『いつか晴れた日に』コロンビア映画、一九九五年公開、制作リンゼイ・ドーラン、監督アン・リー。なお、字幕翻訳は菊池浩司が担当した。
- ② 『高慢と偏見』上 富田彬訳 岩波文庫 一九八〇―一九九頁

- ③ 『日本古典文学全集20源氏物語①』空蟬卷 一二二頁 八〜一〇行目
 ④ 同右 夕顔卷 一四五頁 五〜七行目
 ⑤ 同右 帚木卷 一〇三頁 一四〜一五行目
 ⑥ 同右 桐壺卷 四九頁 二〜七行目
 ⑦ 同右 桐壺卷 五〇頁 五〜六行目
 ⑧ 同右 帚木卷 九一頁 六〜二行目
 ⑨ 後述するように、夕顔は「雨夜の品定め」で「常夏の女」として言及され、六条御息所は「夕顔卷」冒頭で「六条わたりの女」として現れる。
 ⑩ 『日本古典文学全集20源氏物語①』空蟬卷 一二二頁 一〇〜二二行目
 ⑪ 増田繁夫「空蟬と夕顔―処世のかしこさとつたなさ―」（『源氏物語の探求第五輯』所収）一頁二行目〜二頁一〇行目
 ⑫ 『任氏伝』との関連は新聞一美「もう一人の夕顔―帚木三帖と任氏の物語―」（『論集中古文学五 源氏物語の人物と構造』笠間書院 一九八二年）などに指摘がある。また三輪山式神婚説話の影響については、高階正秀「源氏物語『夕顔』卷の成立―三輪山式神婚説話の系譜―」（『高階正秀著作集 源氏物語論』桜楓社 一九七一年）等に詳しい。
 ⑬ 「帚木」は信濃国藪原にあり、遠くから見るとあるよう見え、近寄ると形が見えないという伝説の木。和歌では、なさけがあるように見えて実のないこと、姿は見えないのに会えないことを表現するものとして詠み込まれることがある。
 ⑭ 『日本古典文学全集20源氏物語①』帚木卷 一二二頁 一行目、五行目
 ⑮ 同右 帚木卷 六〇頁 一一〜一四行目
 ⑯ 西郷信綱『日本古代文学史』（岩波現代文庫）第3章物語文学の時代 三女房社会 一七二頁 六〜七頁
 ⑰ 『日本古典文学全集21源氏物語②』総合卷 三八〇頁 七〜九行目
 ⑱ 『日本古典文学全集25源氏物語⑥』手習卷 三〇〇頁 一行目
 ⑲ 例えば『伊勢物語』第一段は、初冠したばかりの男が春日の里で美しい姉妹に出会う話である。また、『宇津保物語』「俊蔭卷」には俊蔭の娘が北山の森の木のうつつは（空洞）で息子を育てる話が含まれている。
 ⑳ 『日本古典文学全集20源氏物語①』夕顔卷 一四〇頁 一行目
 ㉑ 『日本古典文学全集20源氏物語①』帚木卷 一〇二頁 八〜一二行目

『源氏物語』の方法

- ⑳ 藤田加代「『空蟬』の物語―空蟬造型の特異性について―」（高知日本文学研究会『日本文学研究』第二十八号所収）五六頁 上段一六行〜二〇行目
 ㉑ 林真理子『六条御息所 源氏がたり 一、光の章』七四頁 一〇行目〜七六頁 二行目
 ㉒ 原田敦子「空蟬の夢」（森一郎編著『源氏物語作中人物論集』所収）一八二頁 七〜一五行目
 ㉓ 増田繁夫「空蟬と夕顔―処世のかしこさとつたなさ―」（『源氏物語の探求第五輯』所収）六頁二行目〜三行目

参考文献

- 『高慢と偏見』上 富田彬訳 岩波文庫 一九九四年
 『日本古典文学全集20源氏物語①』小学館 一九九四年
 『日本古典文学全集21源氏物語②』小学館 一九九五年
 『日本古典文学全集25源氏物語⑥』小学館 一九九五年
 以上 校注・訳 阿部秋生 秋山虔 今井源衛 鈴木日出男 小学館
 大島一彦 『ジェイン・オースティン 世界一平凡な大作家の肖像』中公新書1343 中央公論社 一九九七年
 西郷信綱 『日本古代文学史』（岩波現代文庫学術152）岩波書店 二〇〇五年
 原田敦子 「空蟬の夢」（森一郎編著『源氏物語作中人物論集』所収）勉誠社 一九九三年
 林真理子 『六条御息所 源氏がたり 一、光の章』小学館 二〇一〇年
 藤田加代 『『空蟬』の物語―空蟬造型の特異性について―』（『日本文学研究』（高知日本文学研究会）第二十八号所収）一九九一年
 増田繁夫 「空蟬と夕顔―処世のかしこさとつたなさ―」（『源氏物語の探求第五輯』所収）風間書房 一九八〇年
 蛭川久康著訳 『ジェイン・オースティン』（講座イギリス文学作品論3）英潮社 一九七七年

（本学大学院研究生）